

○三木幹子* 綾田雅子* 丹羽雅子**

(*共立女子短大, **奈良女大)

<目的> 力学特性の異なる数種の試料布を用いてカウルネックを製作し、人台に着装させた状態の静的ドレープの美しさについては、既に一対比較法により視覚官能評価を行った。本報では人体に着装し歩行した状態の動的ドレープの美しさの評価を行い両者を比較する。また“ドレープの美しさ”の評価内容を明確にするため、複数の評価項目を設定して動的ドレープの視覚官能検査を行い、素材の力学物性との関係についても明らかにする。

<方法> 15種類のカウルネックサンプルを用いて、静的および動的なドレープに関する官能評価を行った。静的評価では、各サンプルをJIS婦人9号サイズの人台に着装させた状態でのドレープについて、動的評価では実際に9号サイズの人体に着装させ、一定距離の歩行時における動的ドレープについての視覚評価を行った。被験者は20代の女性で、静的評価20名、動的評価22名とし、官能評価は20組の形容語対についてSD法による5段階尺度で評価を行った。

<結果> 静的、動的の両評価における“カウルネックとして良い”の項目と“弾力性がある” “規則的” “ふっくらした” “豊かな”などの項目との間に高い相関が見られ、カウルネックに必要とされるシルエットや素材の力学物性に関する条件が示唆された。因子分析の結果、静的評価では3因子、動的評価では4因子のカウルネックのドレープ性能に関する基本因子が抽出された。また、静的評価よりも動的評価の方が、視覚官能評価によるドレープの美しさを素材の単位面積当たりの曲げ・せん断変形特性に関する複数の力学特性値をパラメータとして、高精度の予測式を導くことができた。